

○25番（牟田勝浩君）〔登壇〕

皆さんおはようございます。議長より登壇の許可をいただきましたので、質問を開始させていただきます。

議会と執行部は、車の両輪というふうに常々あらわされています。そして、市民の皆様も、執行部だけでなく、役所だけでなく、議会の議員もどうなっているだろうと見なきゃいけないということで、若木町におきましては、区長さんが一般質問のスケジュールを集会で皆さんに配り、ぜひ見てくれというふうに行っておられます。素晴らしいことだと思いますし、メタボなこの体も引き締まりますね。

ということで、最初の質問に入っていきますけれども、皆さん米通帳って御存じでしょうか。正確には米穀通帳と言うんですけども、これは戦後、配給制度があったとき、米はそれでは買えない、それがなくては買えないという制度でした。これは1981年、私が高校2年生ぐらいのときまで続いていたらしいです。1981年というと、バブルが始まったG5の1985年、その4年前まで米通帳制は食管法上、続けられていたと。でも、実際は使われていなかったと。40歳以下の方はほとんど多分知らないと思います。

先ほど農業に精通されている小池議員に「知っていっちゃいますか」とお伺いしたら、「いや、私も知らんばい」と。それぐらいあんまり知られていなかったかもしれませんけれども、それでも1981年までは続いていたと、そういう制度があります。こういった、制度は残っていても変えられることが多々あると。今ある常識もいずれ、「ああ、そういうことのあることの」となることも多いと思います。

ということで、1番目の質問、行革についてであります。

米通帳同様、制度は残っている、形式も残っているけど、変えることができる、既に内容は変わっている、国の制度も変化しつつあると。そういう中で、今回、市場化テストというのが始まりました。これは福田内閣が先年12月24日に閣議決定して、公共サービス改革基本方針ということで、今現在、総務省のホームページ、内閣府のホームページにも、ここからここまで民間に委託することができますよと、そういう範囲が掲載されております。

行政の執行部担当者も十分御存じと思われますが、今現在、この武雄市は県内において最も注目されており、いわんや全国、そして九州内でも大変注目されている自治体の一つであります。この市場化テスト、ことし1月にそういうことで発表されておりますけれども、この調査、取り組みの体制はどのようになっているのか、これをまず最初にお伺いしたいと思います。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

公共サービス改革法は、窓口6業務が対象になっています。例えば、戸籍法に基づく戸籍

膳本等の交付の請求であったりとか、あるいは納税証明書であったりとか、6項目あるわけですね。これについては、我々としては、もし任せられるところがあるといったことについていえば、それはコストの問題、あるいは個人情報の問題等々がクリアできれば任せたいというふうには思っています。しかし、これに手を挙げるところがなかなかかわけですね。だから、それは県なり我々の告知不足があるかもしれないし、なおかつ、これを任せて民間側にどういうメリットがあるかわからないといったことでありますので、これがコストの削減、市民サービスの質の向上になるかどうかについては、民間を含めてもう少し検討の時間を与えていただければありがたいというふうに思っております。

○議長（杉原豊喜君）

25番牟田議員

○25番（牟田勝浩君）〔登壇〕

この議会でも何度も私、言っていることなんですけれども、思い起こせば十数年前、私が議員になって最初のころ、窓口で、何で「いらっしゃいませ」「お待たせしました」「ありがとうございます」が言えないんですかと、十数年前ですよ、言ったところ、「なして言わんげいかんとですか」と逆に言われました。そこからずっと、この窓口委託が私の頭の中で始まり、公共サービス改革法に基づいてこういうことができますよという紹介を、前市長、前々市長時代でも行ってまいりました。今現在は十分そういうふうな対応はやっていらっしゃると認識しております。

今現在、武雄市の窓口に来られている方は年間約10万人。そして、その手数料に対する収入は2,800万円、約3,000万円近くなりますね。その他、今おっしゃった6項目以外にもまだありますので。私が以前より言っていたのは、金融機関を対象にそういう業務委託ができないものかということを、先ほども申しました。前市長、前々市長時代にも申し上げていました。

というのは、一番今度の改革で言われている守秘業務、これは金融機関は十分納得されて守られていると思っているからです。そしてもう1つ、年間10万人の来客というのは物すごく金融機関にとってもメリットだと思います。これは私の机上の空論でしかないので、こういうふうな形で言っておりますけれども、また、今度は住民の移動届、そして国保とか各種の手続、そして被保険者証の交付業務も拡大されて、そういうこともできるようになりました。さらに、多くの手続が民間に委託できるようになっております。

これを民がやってくれるとなると、今、市民課にいらっしゃる職員を別の重点項目の部署に集中配備できるわけですね。今、市長が一生懸命頑張って成果を上げられている観光とか産業とか企業誘致、いろんな面に人的な部分をそっちに集中配備できるというメリットもございます。

そして、今度の市場化テストの一番のみそ、みそはみそなんですけれども、これはどうい

うことかという、今度の市場化テストも、物すごいページになるんですけど、一応ざっと読んでみました。ざっとというか、詳しく読みました。今度の場合、入札は、例えば武雄市役所の窓口を入札した場合、先ほど市長がおっしゃられた、やってくれる民間が入札されると。そして、この武雄市役所自体も入札するわけですね。変な感じでしょう。市が入札しませんかと出しといて、市役所も一緒に入札すると。これは民だけじゃなくて官の入札というふうな部分があります。

これは、市が入札するとどういうことになるかという、市もその中で一生懸命それを落とさなきゃいけないということで頑張られるはずですよ。今かかっているコストが、例えば、市民課だけで年間6,000万円かかっているとします。でも、入札するならもっとこういうことを削ってやれるんじゃないかというふうに努力されると思います。もちろん今でも努力されていると思います。そういうふうに民と官が入札できると。もちろん、そのまま武雄市役所が落札されても結構。ただし、入札前提としては、今までよりもコストダウン、そして効率化というのをあわせ持って提出しなきゃいけないと。そういうのがこの市場化テストのみそであります。

そういうふうに、先ほど言いました金融機関にとっても年間10万人というのは物すごく魅力だと思いますし、守秘業務等々考え合わせまして、そういう今私が言ったことは検討の対象になるかどうか、これをお伺いしたいと思います。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

最終的には、そこまでいくのかなというのは思っています。やっぱり時間がこれは必要なというのは思っておりますけれども、それよりもまず第一に、今、県と実は調整を始めておりますけれども、例えば、韓国の場合は住民票であったり戸籍謄本であったりを自宅でとれるわけですね、もうすべて。その機械、あるいはシステムはどこのとば使いよっかという、メイド・イン・ジャパンです。日本です。しかし、韓国では国が一元化して、どこにいても、どの家で、どのタイミングでもとれるというふうになっているわけですね。我が日本ができないわけがない。

それから考えると、先ほどの入札してどぼんとやるよりは、まずできることから、技術的にもできるわけですよ。だから、さっきおっしゃったように、例えば、それは銀行でできるかもしれない、あるいはスーパーでできるかもしれない。そういったことを、武雄市だけではなくて、パイが小さいですので、県全体として考えることができないかということで私は県に今投げかけていて、県が今度、市長会であったり、町長会だったり、そういったことに投げかけるというふうに思っておりますので、県全体としてこれはいくと、それを強力にバックアップしていきたいというふうに思っております。

○議長（杉原豊喜君）

25番牟田議員

○25番（牟田勝浩君）〔登壇〕

メード・イン・ジャパン、いい響きだと思います。

これは多分10年ほど前、町ごとの公民館でファクスを使って住民票、印鑑証明をとれないかという質問をしたことがあります。そのファクスも、きちんとした精度を持ったファクス、そして、その用紙——用紙が一番大切らしいです。公印が打ってなければ、それは無効ということになっておりましたので、そういうことですね。それも多分メード・イン・ジャパンだったと思います。

ぜひ今言った、私はもう先ほど言いましたように机上の空論という形で、雇用ができればいいなということで言いましたけれども、この市場化テストというのは大変おもしろく、先ほど言いました米通帳みたいに、「昔はこがんやったとけ、今はこがんの」と、「昔はこがんやったとけ」というのを忘れられているくらい、大分変わるこの行革のシステムだと思いますので、ぜひよろしくお願ひしたいと思います。

では、続きまして行革の2番目、これは決算委員会でもよく見られる不納欠損——不納欠損というのは徴収不可能、損金で上げる、俗に言う決算上の損金の部分です。そういうのを見ると、すべての不納欠損を合わせると年間数千万円に上がります。現在の徴収は、税務課納税係の皆さんが頑張っているらしいです。でも、各種いろんな、例えば、市税、水道使用料、保育料、市営住宅使用料、いろんな徴収方法が行われています。

市民税は、もちろん税務課納税係。そして、水道使用料は水道課、場合によっては税務課と連携する。保育料は未来課、場合によっては税務課と連携。市営住宅は建設課。ただし、これは自分が聞いたところによると、市税も同時に滞納している方のところを対象としている。例えば、水道料も滞納し市税も滞納している方、両方合わせるとそういうところにいる。例えば、水道使用料のみ滞納している方は水道課が対応しているというふうに聞き及んでおります。

そういうことで、先ほどの続きになりますけれども、優秀な職員を重点なところに集中配備するという項目からでも、本来の業務、水道課なら水道課の業務、未来課なら未来課の業務というのを行われなければならないと思いますので、すべての——今もう横のつながりは十分できると思います。すべての滞納分、俗に言う滞納分の徴収を1つの課に集中させてしたら、先ほど言いました各々の職員を集中して本来の業務に当てられるんじゃないか、そして、浮いた時間をより本来の業務に向けられるんじゃないかとも考えられます。

そしてもう1つ、もう一歩進んで考えれば、徴収しているのは、武雄市は武雄市だけではなくて広域圏というのがあります。広域圏は介護保険があります。介護保険の徴収は広域圏の方が行っているらしいです。そういうのも含めて一元的に徴収方法を集中すれば、先ほ

どの繰り返しになりますけれども、本来の業務に集中できるのではないかと。広域圏に関しては、各自治体の集まりですけれども、そういうところもあわせてやれば、できるのではないかと思いますけれども、以上のことについてのコメントをいただきたいと思います。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

まず、税務課納税係、我々は税務課納税係ですけれども、非常に頑張っています。県下でも知事からお褒めをいただくほど頑張っているといったことが前提にあって、基本的に納税係が今やっていないものについては、下水道使用料、あるいは農業集落排水使用料ですね。それと、先ほど話が合ったように、介護保険料の徴収については杵藤広域圏がやっているという状況にありますので、先ほどお話がありました事務の一元化、あるいは納税のプロである納税係に一元化の方向で考えていきたいというふうに思っております。

○議長（杉原豊喜君）

25番牟田議員

○25番（牟田勝浩君）〔登壇〕

ぜひ検討していただきたいと思います。

行革は、この2点を質問項目に上げておりました。

現在、きのう聞いた話では、例えば、競輪は今売り上げが伸びているらしいです。これはもう関係各位の御努力だと思います。そういう中で、さらに行革を発展させて、身軽になって、職員さんたちの能力を十分発揮できる重点配備とかが必要だと思いますけれども、これからは頑張りたいと思いますし、よりよい検討をしていっていただきたいと思っています。

それでは、行革に続きまして、2番目、地域の活性化の部分に入っていきたいと思います。

今現在、個人所得の拡大、地方から都市への人口集中、少子・高齢化、行政の財政難という状況下、そういう状況でも行政への需要というのはますますふえてきております。現在の財政状況の中では、どれもこれもやるというのは限界があると思います。ゆえに、政策の中でもより効果的な、より納得してもらえるようなものが求められてきていると思います。今までのように「均衡」「平等」というキーワードから、やっぱり「独自性」というキーワードが必要になってくると思いますし、市長はそれを十分、今現在、就任されてから発揮されて、この武雄市の独自性を出されていると認識しております。住民の皆さん方からも、特徴ある自治体として十分認識していただいていると思っております。その中でも、人口政策は大変大切なものだと思っております。自治体の基礎はあくまで人、その人をいかに維持、確保していくか。今までもこれからも、大きな課題の一つだと思います。

ここに、市民課のほうから1つの資料をいただきました。各町別の出生者数、年度ごとに

子供が生まれた数ですね。これはもう平成15年から19年までの5年刻みの資料をいただきました。ちょっと数町を御報告したいと思います。

私の地元、若木町では、5年間で54名の子供が生まれております。1年間で10.8人ですね。例えば、武内町、平成15年から19年まで同様に86名の方が生まれました。東川登町で82名、これは年間平均16名の出生です。西川登町で年間平均18名。橘町で1年間平均22名の出生が確認されております。

そういう中、今回、市の共同まちづくり事業交付金制度では、周辺部の人口減少率や周辺部率などをかんがみていただき、本当に周辺部の人口減に対して御理解していただいているもの大変感謝しております。また、さきに完成しました市の総合計画の中でも、均衡ある発展で平成28年までに3,100人の人口増を見込み頑張ると言われています。そのときの平成28年度目標は5万2,300人を目標にしていると。

ところが、数字を見てビックリドッキリメカ発進なんですね。合併時は5万1,497名だった。ところが、今現在は5万2,129名。ふえているんですね、大幅に。全国的には、平成18年を境に人口減少傾向があっています。武雄市近郊は高齢化が進んでいますので、平成17年を境に人口減少は始まるものと。実際、始まっております。ところが、今現在の武雄市は合併時より人口が多くなっているというふうに数字で出ております。これは私自身も資料をいただいて、ずっと比較していったら、びっくりしました。これはやっぱりこの2年間の成果だと思いますし、この人口増はこれからも伸びていけばいいと思います。

そういう中で、先ほど数字を言いました。でも、周辺部は人口が減っていると。現在、市はこのような周辺部人口の減少緩和の一環で、定住特区補助事業を行っていただいております。これも大変感謝する事業であります。住宅新築で上限100万円、中古住宅改修で50万円、すばらしい事業だと思っております。

今、すばらしい事業として感謝しておりますと言いましたけれども、ついでにもう1つ検討していただきたいのが、さらに住宅関連の施設の整備補助みたいなのができないか。例えば、周辺部で――市長がおっしゃいました。例えば、周辺部に市営住宅とかなんとかはいかがでしょうかというふうなことを前伺って、周辺部はなかなか厳しいというふうな答弁をいただきましたので、業者が周辺部に集合住宅及び団地とかを造成したりする場合は、そういうふうな何かしらの補助がいただけないものかと。

これは周辺部にそういうふうな需要があるかどうかなんですけれども、たまさか私の家の前に中古住宅が2軒あって、売りに出されていました。私は、うちがたまたまその住宅の前でお店をしていますので、やっぱり聞きに来られるんですね、「あそこは幾らですか」と、「話を聞いてきましたけれども」と、「ここら辺はどういうところですか」と。それで、1つはすぐ埋まりました。いま1つのところも、まだ入っていらっやしませんけど、そういうふうな引き合いがよくあります。

そういう中で、やっぱり周辺部にも住んでいいという方は多いんだなということも実感し、そして、いろんなところで話を聞くと、こうやって住宅団地みたいなのがあれば、ちょっと帰ってきて家を建てたいという方も実際二、三名、話を聞いております。そういうふうな団地造成とか集合住宅の造成とかのそういう補助制度は検討していただけるものかどうか、これは住宅ストック計画、そしてマスタープラン、総合計画の中の実施計画の中でも、そういうことをうたっていただければ幸いなんですけれども、そういうふうな事業の検討は可能かどうかのお伺いをしたいと思います。

○議長（杉原豊喜君）

末次企画部長

○末次企画部長〔登壇〕

お答えをしていきたいというふうに思います。

議員御指摘のとおり、周辺部については定住特区補助制度を設けまして、周辺部対策には取り組んでいるところでございますけれども、今議員から御指摘ありました団地造成に係る助成というふうなことでございますけれども、現段階につきましては定住特区補助制度、あるいは空き家バンク制度を設けておりますので、その分で御理解を願いたいというふうに思っています。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

制度的均衡を考えたときに、先ほどの質問を聞きながら思ったのは、事業者の皆さんたちに対してエリアを区切ってみても、なかなかその支援ということで市民的な合意がとれるのかというのは、ちょっと素朴ながら感じております。例えば、そこに若木町なり西川登町、あるいは武内町に入りたいという方々に対して、今やっておりますように定住促進特区の補助金を出すというのは、割とその市民的合意はとりやすい。しかし、それを事業者にということになる、やっぱりこれは税金の中でこういうふうにやらなきゃいけないということになると、果たしてきちんとした合意がとれるのかどうかというのは若干ながら不安に思っております。

それで、以前NHKで、きょうお見えになっていますけれども、北海道伊達市の特集がありました。これは北海道伊達市だけにはどこも人が集まっていると。その内情を詳しく分析したレポートのような番組があったときに、はっと思ったのは、ほかのところは、先ほど言ったように、武内町もそうですが、補助金をきちんと出してくるといったときに、伊達市以外というのは集まっていないんですね。伊達市に集中していると。それは集中が集中を呼んでいるというのはあると思うんですけど、そこで1つきっかけになったのは、地元の皆さんたちが、例えば移住コンシェルジュ——これは民間です。というのをつくって、いろんな、

もう引っ越しのときから、その前からその後に対してまでもきちんと相談に乗っているという事で、それが評判が評判を呼んで、あそこに移住コンシェルジュのきちんとおらすけんということで今入っていると。年間2,000人から3,000人も入っとうわけですね。となると、これはきちんと、その制度も大事です。しかし、そういうソフトの部分で、もてなす気持ち、あるいはそれに相談に乗るということが、僕は必要不可欠な条件ではないかというふうに思っております。

若木町にはNPOの建物循環もありますし、そこが今、いろんな問題点もあるかもしれませんが。しかし、そこがきちんとやることに対して、地元の皆さん、あるいは我々というのは、その後押しをして、そこがまた人を連れてくると、呼んでくるというふうな流れに持っていきたい。今ちょうど伊達市に負けず劣らずの状況に僕はなりつつあると思っておりますので、ぜひそういった御理解と、そういった取り組みに対する地域のまとまり、後押しをお願いしたいなというふうに思っております。

○議長（杉原豊喜君）

25番牟田議員

○25番（牟田勝浩君）〔登壇〕

制度的には大変厳しいという答弁をいただきましたけれども、先ほど市長がおっしゃられました地域でまとまって、そういうソフト面を充実していくという形も必要かと思えますし、地域としても頑張っていきたいと思えます。

ただ、もう1つ地域活性化のところでお願いしたいのが、市のホームページを見ても、新築で幾ら、改築で幾らと載っていないんですね。例規集の中をずっと調べていくとあるんですけれども、ホームページの、もちろんトップにも載っていませんし、ずっと入っていてもなかなか見つけられない。

今、多久市がくしくも、まねしんさったっちゃなかばってん、同じんごとしんさったですね。多久市のホームページは載っとうわけですよ、いきなりホームページのところに、多久市に永住しませんかという形で、そこからぼんと入られると。武雄市は、ちょっと私、きのう探しましたが、わからなかった。だから、そういうところをぜひトップにやっていただきたい。

ちょっとこれはもう余談になりますけれども、後で追隨してきた多久市に聞いたところによると、順番待ちらしいんですね。やっぱりそれはホームページから入ってきているらしいんですよ。今79世帯、約80世帯が申し込みしているらしいです。その中で、まだ二十数世帯が順番待ちしていると。せっかくよか制度をつくったとけ、なかなかその広報の部分がですね、四、五日前なんですけれども、知り合いが武雄に来るからということで、その補助制度を使いたいということで市の職員が見られたんですけれども、その市の職員自体も例規集を探さなきゃいけないという状況だったんですね。一般の方というのは多分無理だと思うんで



すよ。せっかくこれをつくって、だんと出した後に、それを見つげるときになかなか見つけれないというのがありますので、ぜひそういう広報をトップページに載せて、どんどん宣伝していただきたいという要望がございますけれども、いかがでしょうか。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

きのう夜、この質問に備えて、私は多久市は見えていませんけれども、伊達市を見ていたときに、まさに同じようなのがありましたので、これはぜひやろうというふうに思っています。

今、皆さんどうやって探しているかということ、検索で来るわけですね。検索のサイトが、もう5年ぐらい前からすると、世界で見たときに5億倍から7億倍になっていると。となると、やはりそういうふうに、例えば「武雄」で引いたりとか、あるいは、いろんな引き方があると思いますけれども、それがトップに来れるように、我々とする、トップページに項目が、市民の皆さん、事業者の皆さん、観光とあっていますので、その1つの項目のところにきちんと加えて、トップページから入られるようにしたいと思っています。当然、多久市はまだ拝見しておりませんが、議会が終わったら多久市も見て、いいホームページ、よりよいホームページにしたいというふうに思っております。

○議長（杉原豊喜君）

25番牟田議員

○25番（牟田勝浩君）〔登壇〕

ありがとうございます。ぜひそういうふうにして加えていただければ――。武雄市は、せっかくいい制度をつくったのに、その後、広報ができないと、いい制度がもったいないんですね。例えば、今度3月議会でやっているんですけども、減額補正というのはもったいないんですね。せっかくいい制度がありますし、ひょっとして多久市に来られている方が、武雄市のホームページを先に見て、なかったからこっちに行ったと、もし万一、逃げていったらという言葉は――もったいないんですけども、そういうことでやっていただきたいと思います。今後やっていただけるということで、ふえると思います。

では続きまして、次の質問の観光であります。

一昨年の「がばいばあちゃん」、そして昨年の「TAIZO+TAKEO展」、そして最近の「三湯物語」、集中して物すごく知名度が日に日に上がってきていると思います。

三湯物語、きょうは3月10日ですから「3・10（さんど）」で、ちょうどいい質問かなというふうに思いますけれども、先日、長崎のランタンフェスタに行っまいりました。それは浮世離れしていて、非日常性、そして、これはもう観光客は来るなという気持ちで見てきました。やっぱり非日常性、そして集中というのは本当に大切なことだと思います。武雄の「佐賀のがばいばあちゃん」が成功したのも、やっぱりあれに市長を先頭に、みんな集中し

たから大成功したと思うんですけれども、ランタン祭りとか、赤ちょうちんなんて上にずらっと、もうせこせこせんで、どわーっとあるわけですね。やっぱりそういうふうな一点集中だと思います。

これはちょっと変な話になりますけれども、戦略論の中でも兵力の分散というのは愚の骨頂だと。ぴっぴっぴっと出すのはもう各個撃破されるので、集中するというのは基本中の基本だということでもあります。これは事業にも当てはまると思います。ランタンフェスタはよかったです。本当に非日常性でよかったです。

ところが、武雄もやっぱりありました。私、この前、非日常性を味わわせていただきました。世界一飛龍窯祭り、大変すばらしかったですね。これは大田副市長が会長だったですかね、もう寒い中、手をグーにして表彰式を行われていました。でも、本当にすばらしかった。武雄にこういうふうな非日常性が創造できるのかと感心しました。これは私だけじゃありません。多くの方がおっしゃっていました。例えば、会議所の若い人たちと話をしていたら、「武雄もすばらしかったですね」と。もう本当に、飛龍窯の周りにともされていた千数百個、2,000個近い灯籠の炎が何とも幻想的。そして、柄崎太鼓の太鼓、それに伴うあの3本の火柱。これは本当にもうランタンフェスタに負けないくらいの非日常性だと思っております。ある方は「これをクリスマスとかにしたら、物すごく来るっちなかですか」と、そういうふうなことまでおっしゃっていました。行った人は多分、同じような感想だと思います。

そういう中で、私、前も議会で質問しましたがけれども、特定の事業を言っちゃいかんのですけど、例えば「時巡り温泉祭」とか、いろんな事業があります。そういうのを集中して、1つの事業につき込んで、それをまず成功させると。そういうふうな事業の集中と非日常性の創造、こういうのができないかと。本当にですね、私個人も思いましたし、周りからこんなにすばらしかったと言われたのは初めてです。そういうふうな事業の集中ができないものかというのを、まず第1点目の質問でお伺いしたいと思います。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

飛龍窯祭りに関しては、窯元の皆さん、そして消防団の皆さん、あるいは地域住民の皆さん、職員の皆さん、本当に1点頑張るということで、本当に私からも感謝をしたい気持ちであります。

その成果が実って、実は私のところには毎日大体50通から80通メールが来ます。いろんなメールが来ますけれども、あるいは私はブログを開設しています。あの飛龍窯祭りのあった日、翌日は、その3倍ぐらいになったわけですね。ですので、もちろんそれは全部が全部よかったわけじゃありません。ですが、私が感じているところの9割ぐらいは、よかったということでもありますし、先ほど牟田議員から質問があったように、あの時期じゃなくてもよか

ろうもんと、あんな寒いときじゃなくてもよかろうもんと、そういった話があったのは、もう少し行楽シーズンにしてほしいという意見、それともう1つが、いや、やっぱりあの季節こそが燃えるんだとか、さまざまな意見があります。

したがって、それは大田副市長を中心とする実行委員会がありますので、一たんそれを総括していただいて、その上で、来年度どういうふうにしようかというのは決めようというふうに思っております。地域住民の皆さんのお声であったりとか、あるいは窯元の皆さんのお声を真摯にもう一回承りたいというふうに思っております。

その上で、基本的な方向性としたときに、市が関与するお祭りというのは極力減らしていかうというふうに思っています。それはお祭りの一本化とかそういう意味ではなくて、市が関与するものは減らしていったらいい、そこに人的資源を集中していくと。そのタイミング等については、また各実行委員会がありますし、基本的に我々は予算査定というものがありますので、そこで方向性は決めていきたいと思っておりますけれども、基本的な方向性とするならば、牟田議員がおっしゃる方向性と一致しているというふうには思っております。

○議長（杉原豊喜君）

25番牟田議員

○25番（牟田勝浩君）〔登壇〕

そうやって3倍もメールが来たと。私のところは一・二、三倍ぐらいやったとですけどね。とにかくすばらしかったという意見が多かったです。

灯籠の数も、過去何年もああいう灯籠をつくってきています。その灯籠をまた集めるとなると、過去つくってきた分がいっぱい各家庭に、寝ているという言葉はおかしいですけども、幾らでも集められると思います。過去つくったやつをいっぱい集めて、あの飛龍窯、そして温泉通り、3つの大きな木の周り、そういうところに配置していくと物すごくこれは観光資源になると思いますので、ぜひ検討していただきたいと思います。

では、続きまして観光の2番目、これは観光と切っても切り離せない特産品開発であります。

武雄市は、レモングラスというところに力を入れていらっしゃいます。これはもう大変将来性がある部分だと思いますけれども、山崎議員も川原議員もマスクされていますけれども、今このマスクが物すごく目立ってきていますよね。もちろんインフルエンザもありますけれども、花粉症というのは物すごく今、もちろんこの時期に出てきております。

その花粉症で、一説では2,000万人の患者さんがいらっしゃると。この花粉症の方々というのは山ほどいらっしゃるんですけど、もう本当に症状が——私、花粉症じゃないです。花粉症じゃないですけども、もう本当大変らしいです。夜眠れない、目は本当かきむしりたいほどと。何かあったら、わらにでもすがるといふような症状らしいです。なかなか有効な手段もないと。（発言する者あり）ああ、そうですか、市長もですか。

そういう中で、私、ふとしたことを聞いたんですね。私の知り合いで花粉症のひどい方が、これはききますよということで、あるお医者さんとか眼科の先生とかに勧められて、イラクサというカプセルらしいんですよね、これが有効——有効というか、治るじゃないです。症状緩和に有効らしいです。私も1個、今ここに持ってきています。

このイラクサ、これをあけて、見えませんが、こう置くと、レモングラスの粉末といっちょん変わらんわけですね。おかしいでしょう。おかしい中で、実際このレモングラスの粉末を扱っている方、イラクサを飲まないでレモングラスを飲んでいる方、そういう方も症状が緩和しているという話を数名、10人以下4人以上の方から聞きました。ひょっとしてこれ、イラクサもレモングラスも同じハーブ系です。そっくりやっけんよかというわけじゃないですけども、実際そうやってレモングラスを粉末にする作業、そして、レモングラスを扱っている方の症状が物すごい緩和された。何でだろうと。ひょっとしたらレモングラスで、こうやって扱っているからじゃないだろうかということも伺っています。

これは市長も持っているんですか。同じやつかどうかわからないんですけども、これは高いんですね。

〔市長「1万円」〕

これは3,000円のやつなんですけれども、高いですよ。ちょっと違ったらしいです。ただ、わらにもすぎると、これはレモングラスの大きな一つの可能性だと思います。もちろん口に入れるものですから、いろんな調査をして、この効用みたいなのを調査できないものか、そういうふうな花粉症への効能があるかどうか。これは治るといえるのは絶対に言えないですから、効能があるかどうかの調査ができないものか。さっき言いましたように、10人以下4人以上の方がこうやって症状緩和につながったと、ひょっとするとレモングラスを扱っているせいじゃないだろうかという話も聞いております。

先ほど市長がおっしゃいました、私のは1万円と。こっちは3,000円。これは物すごい利益もあるわけですね。利益もありますし、そして何よりも、全国で2,000万人以上の患者がいて、どんどんふえていると。そういう中で、もしこれがそういうふうな症状緩和にきくのなら、レモングラスは今、全国でも武雄の産地が飛び抜けていますから、これは本当に大きな需要、レモングラスはすばらしい製品だと思いますけど、需要をより喚起できる、武雄市のブランド名をより喚起できる一つの方法かもしれませんので、こういう調査ができるのかどうか、これをお伺いしたいと思います。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

調査研究については、来年度の予算に200万円余の枠内でもう計上しておりますので、そこでレモングラスの効用については調査研究をきちんとしていきたいというふうに思っております。

ります。もう実際に、例えば、うちの営業部長がレモングラスを飲んで、日に日に尿酸値が下がりつつあるということを本人は言うておりますけれども、これは医学的、あるいは学術的、あるいは薬学的にきちんとそれを立証しなければいけないということ等もあります。したがって、それは調査研究の中でやっていくのと同時に、まだ大学名は言えませんが、ある大学が提携をしたいという話も来ておりますので、そういった大学の研究機関、あるいは研究室ともきちんと組んで、一部長の言葉ではなくて、より説得力のある効用を出していきたいというふうに思っております。

もう1つ、私も実は花粉症に悩み苦しんでいます。医薬品のほかに、サプリメントと言うらしいですね。同じものかどうか知りませんが、これは私も見たことがあって、それは単に粉末にしてカプセルにして、3,000円から1万円で売っているということでもありますので、これはきちんともう一回、成分・性能を見た上で、そういう製品開発化をぜひやってほしいと思うんですね、そういったことはきちんと法律にのっとった上で。そういった後押しもきちんと、4月からレモングラス課も立ち上げますので、やっていければいいなというふうに思っております。

花粉症で悩み苦しむ皆さん、あるいは尿酸値で苦しむ皆さんというのは、今だんだんふえておられますので、そういった皆さんに朗報をお聞かせできるような手だてもきちんと考えていかなければいけないというふうに思っております。

○議長（杉原豊喜君）

25番牟田議員

○25番（牟田勝浩君）〔登壇〕

尿酸値と。リンゴの名産地じゃないですけども、レモングラスの尿酸値ですね。これはもう、私はそっちの尿酸値のは知りませんでした。そういうふうな効用がきちんと明らかにされれば、莫大な需要が出てくると思います。そうすれば、これは地域のといいますか、生産農家の方々の励みになりますし、それがまた市内で爆発的に広がるきっかけになると思いますので、ぜひ調査してよい結果が出るように祈っております。

では、観光のところなんですけれども、観光にはいろんな資源が眠っているんです。レモングラスも、先ほど言った可能性の資源が残っております。その前に言いました飛龍窯祭りでも、いろんな可能性が残っております。

最近といいますか、初もうでとか、神社とか行きますよね。そこでよく見るのが、何々大学合格とか、物すごく多いのが、全国的に聞くのが二日市の……何でしたっけ、ど忘れした。（「太宰府」と呼ぶ者あり）そのとおりです。太宰府天満宮なんて、もうほとんど受験生じゃないかというぐらい来られていますよね。自分が知っているところも、大学合格とか、何々中学合格とかあります。大学合格は、俗に言う桜咲くと、桜咲いたというのが合格通知の基本形だと思います。武雄には桜門があります。桜の門があります。そういうのもですね、

その門をくぐれば大学に合格するんじゃないかと、そういうふうないろんな考え方の資源がありますので……（「それは違う」と呼ぶ者あり）うん、わかります。字が違うのは十分わかって言っています。そういうふうなことも、いろんな資源があるという意味で言っております。

そういうことで、武雄はいろんな資源があるので、さらに開発して観光のほうに頑張りたいと思います。

それでは、最後の質問の市民病院の件であります。

本議会の一般質問でも、多くの方々がこの市民病院の件は通告されています。これはもう市民の大きな関心の中の一つだと思っております。

私は、ちょうど1年前の3月議会でも質問しました。3月議会の質問の内容の趣旨というのは、地方公営企業を含む公債費比率も国の査定する指標になるという観点から、財政面から民間移譲も視野に置いて検討するべきじゃないでしょうかという意味の質問を3月議会で行いました。その当時の、1年前の議論の大前提は、赤字という経済性を中心にした質問でありました。こういう言葉を使ったんですね、「ごとってきからは遅いんじゃないですか」。これは財政面からの言葉でありました。

他方で、政策として上げられる自治体病院の事業目的は、本質的に——この本質的にというのは、市民の医療水準の維持確保ですね。自治体病院の事業目的、政策として掲げられている目標の、これは収益に結びつかないことが多いと思います。ですから、経済性を論じるに当たっては、単に資本投下の回収だけでなく、投下された資本が目的として掲げられた医療政策の実現にいかにかに寄与しているか、これが大きな争点だと思います。財政面だけでなく、当初の目的をきちんとやっているかが本来の目的だと思っております。

市民の医療水準の維持向上、維持確保、低下防止という観点に関しても、今度、一般質問前に市の救急医療の休止が発表されました。そういう中で、救急搬送の休止が言われました。これはもう財政面だけではなく、その病院が持つ本来の目的まで、ごとってきたんじゃないかというふうなことをつい感じました。

医師が足りないというのが大きな理由で上げられています。それはもう確かにそうですね。佐賀大学医学部から医師を派遣していただいておりますけれども、佐賀大学医学部も最大限にやっていただいて多分この数字だと思います。まさにですね、聞きましたら助教授、今は准教授と言うんですかね。准教授さんまで派遣していただくというふうに佐賀大学医学部も大変努力していただいても、それしこしか医師の確保がなかなかできないというふうに思います。

そういう中で、救急医療がなくなるというのは、本当に武雄市民にとって大きな心配事だと思います。私も昨年、救急車に乗りました。救急車に乗って、やっぱりその時間というのは恐ろしく長い感じるわけですね。確かに、周りには嬉野医療センター、佐賀大学医学部、

好生館、遠くには大村、近くで言えば白石とか、いろいろあると思います。やっぱり急性期、急性期という言葉は昔使っていましたけれども、今は超急性期という言葉が出てきますね。

そういうふうな分を対応していかなければ、市民のもしもの場合の命を守るため——先日くしくも、テレビを見ていたら京都のER病院、救急病院というのが特集であってありました。その院長さんいわく、中核病院は、救急病院は必ず必要であるとおっしゃっていました。これは、市民の皆さん、いつ何どき、どこでどういう目に遭うかわからない。健康体でも交通事故、例えば何かしら病気を抱えている方は、いつ何があるかわからない。やっぱり近くに——近くにという言葉はおかしいです。それはおかしいかもしれませんが、心臓、いろんな部分があると思います。1分1秒を争うとき、近くにあるから、武雄市の周りにいろいろあるからいいというわけではなくて、やっぱり武雄市にも近くにそういうふうな急性期病院が必要だと思いますし、武雄市民病院が発足するとき急性期病院というのは大きな看板でありました。

そういう中で、市民病院の質問はこの1点だけの質問となります。

やっぱり考えるのは救急医療の確保ですよね、救急車搬送の確保。これをやるには、医師の確保しかないと思っています。それはもう当たり前のことだと思います。でも、佐賀大学医学部も最大限の努力をされていますけれども、なかなか確保できない。

私は前から個人的に、独立行政法人——独法、そして民間移譲のどちらかならば、もう民間移譲しかないという主張のほうなんですけれども、それはともあれ、どっちにしろ救急医療を復活させなければいけない、医師の確保をしなければいけない。今、議会でも特別委員会で審査してもらえますと思います。その医師の確保をどのように考えていらっしゃるのか。そして、その医師の確保をきちんとするまでに、その残った9人の医師を守らなきゃいけない。そういう中で、どのように医師の確保を考えているのか、私はこの1点のみをお伺いしたいと思います。これはもう市民の福祉向上には必ず必要な部分だと思いますので、1点だけの質問ですけれども、御答弁をお願いしたいと思います。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

まず、医療環境そのものが、今思った以上に、また非常に変わりつつあって、我々の予測をさらに上回るスピードで、今、医療環境、あるいはその医療を取り巻く社会的環境が悪くなっているというふうに思っております。これは本当に、市民病院のお医者さん、ドクターであるとか看護師の皆さん、病院職員の皆さんたちが今まで一生懸命やってこられて、市民病院が今ここにあるということがありますけれども、その自助努力だけではもういかんともしがたいような外的な社会条件が悪化しているというふうに思っております。その大きな一つが医師の確保であります。これは武雄市民病院だけではなくて、御承知のようにもう日本

でそういうふうになっているわけですね。

じゃ、医者が減っているかと、お医者さんが減っているかといったら、さはさにあらずで、お医者さんそのものはふえているわけですね。しかし、都会にみんな行きんさあわけです。新臨床研修制度ができて都会に行かれています。なかなかこういう地方の病院にはお越しいただけないという状況にあって、しかも今までは、それはある程度、今は佐賀大学医学部ですけれども、医局がしっかりその人材のプールになっていたんですけれども、今お医者さんは医局にも戻らないという状態で、都会にそのまま、高い条件のままいらっしゃるという状況下にあると。非常に佐賀大学の医学部を中心として頑張ってくださいいております。10人が今度9人になりますけれども、本当にありがたいというふうに思っております。

そういう意味で、先ほどお話がありましたように、我々としては医師の確保に向けて、また、佐賀大学の医学部にお願いに何度も行っておりますけれども、さらにもうお願いに行くのと同時に、もう1つが看護師の皆さんです。今もうなかなか採用ができない、お医者さんだけでも看護師さんがいないということになったら十分な医療の提供ができない、そういったことで、我々としては今の維持をいかにしてできるかといったことに心を砕いていく。そのための予算も今回計上しております。

したがって、我々としては2つ、まず医師の確保については引き続き佐賀大学医学部にお願いをしていくのと同時に、今いらっしゃるスタッフの皆さんたちが、本当に生きがい、あるいはやりがいのあるような環境に向けて、我々も努力をしていかなければいけないというふうに思っておりますので、我々としては救急告示の再開に向けて、また努力をしてまいりたいというふうに思っております。

○議長（杉原豊喜君）

25番牟田議員

○25番（牟田勝浩君）〔登壇〕

救急医療、今まで1年間、約七百数十の救急搬送があったらしいです。それが今回休止になると。夜間に関して言えば、五百数十の救急搬送があったと。そういう方が、今度からは市外のほうに向けられると。ということは、市外の病院もプラスアルファ、周りに500が救急で行くということでもあります。

昨今話題になっております俗に言うたらい回し、武雄市民がたらい回しになっちゃいかんと、やっぱり市民の医療福祉の水準の回復に向けて御努力していただきたいと思ひますし、先ほど市長がおっしゃった、今、医療環境が大分変わってきていると。全国の自治体病院の数は、1984年は1,073、2006年には1,061、あんまり変わらんわけですね。ところが、ここ数年間で急転直下している。新臨床研修制度、そして3回から4回にわたる医療報酬の引き下げ等々、本当にいろんな外的要因が多々あると思ひます。

そういう中で、今、市長がおっしゃった救急医療の復活に向けて御努力していただきたい



をお願いし、私の一般質問を終わりたいと思います。ありがとうございました。